

グラスゴー—ヨーロッパ文化首都から 20 年

1986 年、グラスゴーが、1990 年のヨーロッパ文化首都（年間を通しての国際芸術フェスティバル）の開催都市に選ばれた時、誰もが不思議に思っただろう。85 年のアテネからはじまり、フィレンツェ、アムステルダム、ベルリン、パリに続くには、たしかに違和感がある。なぜなら、タイタニックに代表される造船業で栄えた産業都市グラスゴーは衰退の一途をたどり、人口は流失し続け、町には暴力と貧困が溢れていたからである。気候にも恵まれない、最も芸術的ではない町が、年間を通しての一大国際芸術フェスティバルのホストになるということは何を意味したのか。

当初、造船の町、労働者の町グラスゴーには、おしゃれな街づくりはそぐわないという声は強くあった。歴史あるエディンバラ・フェスティバルに叶うはずがない。そもそも、何ら文化的ヴィジョンを持ったことのない、専門家もいない町が主導するフェスティバルで抜本的な転換の糸口をつかめるのか。だが、産業転換に乗り遅れたまま、衰え荒み続けていく町を見続けていくわけにはいかなかった。

80 年代半ば頃から、ヨーロッパ文化首都開催に照準をあわせて、グラスゴーの街の大改造がはじまった。町の中心街でありながら廃墟化が進んでいた地域は、イタリア風の「マーチャント・シティ」として再開発が進み、また、シンボルとして大規模なグラスゴー・ロイヤル・コンサートホールが建設された。六二年に火災で焼失して以来、コンサートホールを持てなかった町に音楽の伝統が戻った。また、どこか忘れ去られていた感のあったレネ・マッキントッシュの美しく繊細な建築群も目を惹きつけた。フェスティバルは成功し、多くの観光客を集めた。通常なら、これで終わってしまう。だが、グラスゴーは、この経験を、飛躍のために活用し続けることを選択した。

もちろん、フェスティバルの開催が巨大な赤字を自治体に残した。また、参加したがために、経済的に立ちいけなくなった芸術団体もあった。だが、この「ヨーロッパ文化首都」開催の成功が、芸術文化的にエディンバラより劣っているというコンプレックスを拭い去り、むしろ、コンテンポラリーで、アヴェンギャルドな芸術創造の場としての発展を促すことになった。

何よりも変化したのは、自治体の意識であったという。人口流出がつづくなかで財政的に豊かではないが、

芸術文化への財政支援を増額した。実際、かつて、芸術団体への支援の内訳が、スコットランド芸術評議会が 20%、グラスゴー市が 8 % だったのが、いまは逆転したという。

インフラ整備も進み、少しユニークな近代美術

館の開館、ギャラリースペースや芸術団体のオフィスが数多く入る CCA（グラスゴー・コンテンポラリー・アーツ・センター）の改築、次頁に紹介するスコティッシュ・ユース・シアター専用施設に加え、今年、マーチャント・シティの片隅のほとんど使われていなかったかつて魚市場であった巨大なスペースが再開発され、45 の芸術家のためのスタジオ・オフィスを備えた「ブリガイト」としてオープンした。演劇についていえば、90 年に 8 団体しかなかった劇団が、世代交替も経て、いまは 60 団体を数えるようになった。もちろん、遅れていた町が芸術で蘇ったとはいえない。だが、新たに誕生した「クリエイティブ・スコットランド」の強い意思もある。芸術への公的助成の大幅削減に直面するイングランドと比して、ここには、いま多分に恵まれた状況がある。

ヨーロッパ文化首都から 20 年になる今年、IETM（舞台芸術の国際的ネットワーク）の大会の場となった。数多くの芸術プロジェクトが市内随所で展開された。それを担ったのは、広告代理店でも、大きな組織でもなく、若き日に 20 年前を経験したインディペンデントのプロデューサー、コーディネーターたちの「チーム」である。彼らが若きスタッフやボランティア学生たちを率い、大きなイベントをまとめていく。仕事の進め方は民主的で、そこにヒエラルキーは存在しない。ヨーロッパ文化首都の最も大きな成果は、インディペンデントなプロデューサー、コーディネーターのような自由でクリエイティブな人材が誕生する基盤、そして、芸術家を支援し、創造し続けていける労働環境を生み出したことだろう。



パフォーマンスも行える巨大なブリガイトのホワイト・スペース。

(中山夏織/Kaori Nakayama)

Theatre & Policy No.64 所収

2010 年 12 月 20 日発行